

Y I C看護福祉専門学校 平成 30 年度 第 2 回教育課程編成委員会 議事録

日時：平成 31 年 2 月 20 日（水） 15 時 10 分～16 時 00 分

場所：5 階カンファレンスルーム

出席者：教育課程編成委員 A 介護福祉士職能団体代表者

B 看護学科実習施設管理者

C 介護福祉学科実習施設代表者

D 看護学科卒業生

E 介護福祉学科卒業生

学校教職員 F～M

欠席者：教育課程編成委員 看護職能団体代表者

1. 校長挨拶

2020 年 4 月から、低所得層を対象とする「高等教育の無償化」を実施することを閣議決定し、現在制度設計が行われている。低所得者であっても社会で自立し活躍できる人材を育成する大学や専門学校に就学できるように準備を進めている。対象機関の条件として①教育の質が確保してある ②定員の 8 割以上の学生が確保してある ③経営が安定しているなどが挙げられており、本校としても条件を満たしたいと考えている。本日は、今年度の課題と来年度の対応に対し忌憚のない意見をいただきたい。

2. 議題

【看護学科】

K 委員説明 資料 I（看護学科）表参照

① I C L S 講習修了認定者の拡大について

取り組みとしては、講習会を 4 回開催し、7 期生 44 名が受講し、認定を受けた。

次年度は開催回数 6 回で予定通り調整をしている。全員受講に向けて取り組んでいきたい。

I C L S は本校の強みでもあるため受講後は O C や保護者会などを利用し、デモの実施回数を増やし技術の定着と質の向上に繋げていきたい。

②看護基礎技術の教材の工夫について

看護 DVD を自己学習以外に講義でも活用し技術の早期習得に努めてきた。

図解では分かりにくく時間のかかる「滅菌ガウンのたたみ方」については年度末に映像化の予定である。

次年度は技術と知識の向上のために空きコマを自己研修の時間として利用したいと考えている。

③国家試験対策の充実、進研アドの導入について

国家試験専門業者と新規連携を図り専門業者による学内講義を年 6 回、業者模試を 12 回実施した。

卒業生による国家試験対策は 6 期生が 4 名来校し対策講座を実施した。今後も続けていきたい。

教員も 1 人 1 科目国試対策講座を担当し全 10 回実施した。下位学生は強制参加とし、その他の学生は任意参加としたがほとんどの学生の参加があった。

下位学生 17 名に対し強化対策として強制登校とし、模試の実施、講義、個別指導、口頭試問、個別面談を行った。

今年度は国家試験前に別会場での模試を実施し、本番さながらの緊張感を体験する機会に繋がった。学生の反応もよく次年度も同じく計画していきたいと考えている。

学習習慣の定着を意識し、今年度より入学前の学生には進研アドの入学前教育を導入し、入学後は学習習慣の定着に加えて基礎学力の向上を目指したインターネット教育のクラッシーに移行し問題の計画配信、並びに年 3 回確認テストを実施した。次年度も 1 年生は同様に、2 年生は国家試験を意識した問題の配信を計画し進めている。

④卒業前技術強化について

昨年度の振り返りをもとに、時間的な余裕を持たせ学習時間の確保を考えた日程調整を行った。技術項目は昨年と同様に 8 項目を 4 日間に分けて実施していく予定である。今年度はより臨床に近づけていくために独自の教材を作成し活用していく予定を入れている。実施後はアンケート結果を集計、評価して次年度に繋げていきたいと考えている。

⑤実習指導の充実について

L 委員説明

実習の小グループを活かした学習の強化と全体実習での事前、事後テストを導入した。受け持ち患者以外の情報を確認し瞬時の看護の方向性を判断していくトレーニングを行った。実習控室では国家試験を意識し5分程度の1問1答タイムを行った。実習領域に関係する国家試験問題に触れることで、臨床にて意図的に観察することに繋がると考え実施した。この取り組みのみの評価ではないが、各学年の実習満足度と努力点（自己評価）の集計結果は、3年生満足度81.2%、努力点78.6点、2年生満足度79.4%、努力点73.6点、1年生満足度71.9%、努力点65.2点であった。学年が上がるごとに満足度が上がっていることがわかったが、1年次に満足度が低いという点が課題にあがる。1年生の意見として「何を学習してくれば良いのか分からない」「学校で習ったことと違った」「指導者と教員の言うことが違う」というような戸惑いがあがった。次年度は1年次の満足度アップを目指し、強化をしていきたいと考えている。上級生の協力を得ながら戸惑い対策をしていきたい。教員の指導力のばらつきや妥当性について学習会と言う形で指導カンファレンスを定期的に取り組んでいながら、教員の指導力の強化に繋げていきたいと考えている。また、臨床指導者との技術指導の連携を強化していきたい。

精神看護学実習における看護過程の強化として、地域実習を5日から1日とし、その分臨床実習を5日から9日に変更した。日数が増加したことで学んでほしい看護過程の展開に向き合っている様子である。また、患者とのコミュニケーションも図れ、信頼関係の構築にも繋がっている。

B委員：1年生の何を学習したらよいか分からないという学生の意見は参考にしたいと思う。実習において国家試験の設問と実習の指導内容が一致しているか、学生が困らないよう指導できるようにしていく必要がある。指導者と学校で習ったことが違うという意見はよく聞く。いろいろなやり方はあるが学生は基本的なところを抑えておかなければならないということを持ち帰りたい。

D委員：ネット教育クラッシーについて、PCやスマートフォンでできるのか。自分たちの頃は、国家試験前に学校の行き帰りなどを利用して国家試験のアプリを活用するところまで行きつかなかった。クラッシーがスマートフォンでできるのであれば1年生からの積み重ねができるのではないかなと思う。本を読むということは電車通学ではなかなかできにくい。スマートフォンであれば通学時間にも使えてよいと思う。

実習に関して、学生のころは何を学べばよいかわからない、教員と指導者の教え方が違うなど経験をしたことがある。そのようなときはグループで協力して乗り越えてきた。そのようなことが実習満足度にもつながっているのではないかな。

自身も1年生の実習を担当するときは指導の仕方など気を付けていきたい。実習のときはこちらから学生に時間をつくるようにしていきたい。

【介護福祉学科】

M委員説明資料Ⅰ（介護福祉学科）表参照

①国家試験対策について

本年度も、過去3年間の国家試験問題や介護協主催の共通試験、学力評価試験等を模擬試験として、合計16回実施した。試験後は、これまで同様に、クラスの平均点や分布率、科目別に結果を集計し、的を絞った学習ができるように進めた。模試後80点未満の学生については、チューター教員が苦手科目を中心に、個別指導・特別講義を行い、全体的にも、科目別国試対策として、9科目実施し重点的に強化をした。その結果、徐々に模試成績の向上が見られた。

国家試験後のアンケートでは、「16回の模試を受けることで、自分が苦手とする項目が分かり、その苦手分野を中心に勉強をすることで、少しずつ解けるようになった」「模試を繰り返すことでマーク慣れ、受験慣れし、全く緊張せず、取り組めた」という記述があった。

来年度に向け、特別講義等の構成や、主体的な自学の習慣化など、さらに工夫をし、成績向上を目指して取り組んでいく。在校生については、3月6日に第1回模試を実施する予定である。

②外国人留学生への支援について

これまで、日誌の添削、漢字の宿題、日本語能力検定対策も含む日本語指導等の補講を行うことにより、日本語の習得や理解を促してきた。期末試験直前には、放課後の時間を活用し、各科目担当教員が学習内容の振り返りを行い強化した。科目単位の修得については、授業の出席状況も問題なく、前期試験は13科目実施し、7名中5名は、単位を落とすことなく、すべて修得している。残り2名は1科目「国語表現」が最終試験となり、現在、単位を修得できるよう担当教員と進めている。後期試験は、12科目実施し、現在、試験結果待ちの状況である。中国からの留学生は、ほとんどの科目を本試験で修得することが出来ているが、ベトナムからの留学生は、本試験で合格することが難しく、再試験で単位を修得できる状況である。介護実習については、現在、1年生最後の訪問介護実習に臨んでいる。

学校生活の様子は、友達も増えて、クラスメイトとも仲良くなり、楽しそうに学校生活を送っている時もあれば、活気がなく、表情が暗く、沈みがちな時もある。アルバイトについては、ほとんどが平日や休日にアルバイトをしている状況である。

今後は、一つひとつの授業の課題に追われるなかで、「いかに、楽しく効率的に、勉強に取り組むことができるのか」を課題として、そして、メンタルヘルス等にも配慮しながら、しっかりサポートし、関わっていききたい。

③地域貢献活動について

11月に新田 東須賀地区にて、20名程度の高齢者の方に、レクリエーションや介護予防体操等を提供した。3月に勝間地区にて、同様に実施する予定である。

2月に勝間小学校にて、小学3年生52名と誠英高校生徒48名に、車いす等を利用した福祉体験を実施した。わずかな時間ではあったが、学生も深く地域の方々と交流を持つことができた。今後も、地域と連携した活動の継続に加えて、教育的活動を高めることができる実施内容や手法の検討を行い、さらなる地域貢献に向け、取り組んでいきたいと考えている。

(4) 2019年度の教育計画について

①国家試験対策の検証と内容の充実

②外国人留学生の受け入れ体制の強化と日本語基礎教育への取り組み

③地域貢献活動、介護福祉啓発活動の拡大

これらについて、来年度は重点的に進めていきたい。

A委員：模擬試験について、点数が足りなかった科目について教えてほしい。

M委員：社会と制度の理解、発達と老化の理解、障害の理解、総合問題 である。

生活支援技術は取りやすいが制度等の問題は難しい様子である。

A委員：外国人留学生の対応については苦勞が絶えないところもあると思う。

E委員：外国人留学生へのメンタルヘルスの問題に配慮をしているとあるが具体的にどのようなことをしているのか。

M委員：定期的な面談や日ごろの様子を観察し、様子が違うときには教員から声をかけるなど普段の学校生活の中できめ細やかな対応をしている。学業の面も大変であるため、細かく見ていかなければならない。

C委員：施設では看護と介護の接触が多いがそれぞれ専門職として協力し合い仕事をしなくてはならない。お互いを専門職と認め、対等な立場としてうまく協働し合うことは看護、介護共に共通の課題ではないだろうか。

A委員：看護は医療の立場から、介護は生活の立場からと立ち位置が違う。それぞれの立場、専門分野があるということを学生のうちから指導してほしい。

E委員：職場では母数が多い者の声が多くなるという傾向がある。「病院であれば看護、特養であれば介護職が多く、また女性が多い職場であれば男性職員の声は小さいなどがあげられる。小さな声にも耳を傾けていかなければならない。

また、職能団体の差であったり、大きな話をするとな政治的な話になったりするが、介護業界は高めていかなければならないのでないかと感じる。

C委員：2021年春からの新カリキュラムの中に介護福祉士は介護現場において中核的なリーダーを担うという様な内容がある。介護福祉士が専門職として自らの意見を発信できるスキルは、学校側が学生に身につけさせなければならぬと感じている。

B委員：現場としては看護、介護双方、専門職として働いているため、意識付けをお互いに高く持つようにと指導している。互いの職業について勉強をしてもらい大分改善されてきた。まだまだ十分とは言えないためお互い専門職としての誇りを持ち働いて欲しい。

新人オリエンテーションでは看護師に対し「自分たちの立ち振る舞いが周りからの見方になる」と言っている。看護師としてどこからみてもプロフェッショナルにみられるような立ち振る舞いになるように、と指導している。誰のために、何のために、何のライセンスを持って働いているのかを考え、それぞれが誇りを持ち、みんなが楽しく働けるようにしていきたいと考えている。

F委員：専門職は人にあれをしろと言われてするものではなく、自助作用で高めていかなくてはならない職種でありプロフェッショナルである。自分で自分を磨くそれが基本であるがそれができる基礎を学校で身につけさせなければならぬと感じた。

J委員：次年度はこの方針に基づき運営していくこととなったが了承いただける方は挙手をお願いしたい。

(全員挙手)

全員一致で了承。